

# 素人時代の江戸川乱歩作「長詩 オルレアンの少女」について

宮 本 和歌子

はじめに

江戸川乱歩（明治二七年生、昭和四〇年没。本名平井太郎。）は、大正一二年四月『新青年』に掲載された短編作品「二銭銅貨」で作家として世に出た。早稲田大学卒業以降から専業作家としての活動を開始した大正一四年までは、会社勤めをしたり実弟と古本屋経営をしたり「転々とした職業が二十幾つあるといふ様な」（江戸川乱歩「あの作この作」、昭和四年七月博文館『世界探偵小説全集』第二三巻）、多様な職業経験の持ち主である。

「学生時代に、読んだものの短評を書き集めて、それを分類して、三百何十頁の手製の書物を作」（「あの作この作」、前掲同）つたと述べ、昭和七年発表の「火縄銃」の原案は大正五年以前、「学生時代、日記帳の余白に書きつけておいたもの」（江戸川乱歩「あとがき」、昭和三八年六月桃源社『江戸川乱歩全集』第一八巻）だともあることから、専業作家となるまでの職業経験だけでなく学生時代の読書体験や私的な創作もまた、後年の江戸川乱歩という作家の作風形成に大きく寄与していたと考えられる。

本稿では、彼が大学二年生の大正四年一月『自治新聞』に発表した「長詩 オルレアンの少女」の取材源を探り、多数存在するジャンヌ・ダルクをテーマとした文芸作品のうち、特にそれを取材源に選択した理由を考察する。

江戸川乱歩が第二次世界大戦中から制作に着手した自伝的スクラップブック『貼雑年譜』によれば、大正三年彼が「大学部二年二十一才の暮」、伊賀出身の代議士川崎克が主宰する『自治新聞』の編集を手伝っていた。江戸川乱歩、長谷川光太郎、斎木政太郎編『川崎克伝』（昭和三十一年二月川崎克伝刊行会）によれば、川崎克が『自治新聞』を興したのは川崎が三五歳の大正三年夏頃、尾崎巽堂に従い政治活動を行う傍らのことであつたという。「事務所を日本橋呉服橋」の脇におき、自ら社長兼主幹として堂々の筆陣を張」っ

たが、大正三年一二月二五日の議会解散に伴う大正四年三月二五日衆議院議員総選挙への中正会公認としての立候補により発行を一時中止、当選後も政治活動の多忙さからそのまま廃刊したという。

『貼雑年譜』では、「長谷川君ト私トデ編集実務に当ツタガ、後ニハ主トシテ私ガヤルコトニナリ、記事ハ勿論、カットヤ表紙ナドノ絵モ私ガ書イタ。（中略）同誌ハ大正四年一月号（第四号）デ資金難ノタメ廃刊ニナツタ」（『貼雑年譜』）と、少ない人員で発行を行っていた様子が記されている。

『貼雑年譜』には、大正三年から約一年間、五冊ほど発行した肉筆回覧雑誌『白虹』について記した中に「私ハ何かシラ雑誌ノ編集、発行トイフヤウナコトヲシナイデハ我慢ガ出来ナカツタノデアル」とあり、『自治新聞』の編集補助作業は彼の趣味にも沿っていたと考えられる。『白虹』発行時期は『自治新聞』の編集補助を行っていた時期と若干重なっており、『白虹』に寄稿した長詩をそのまま『自治新聞』に掲載したこともあると『貼雑年譜』に記されている。それが、「長詩 オルレアンの少女」である。

## 一、明治、大正期の日本におけるジャンヌ・ダルクの知名度

「長詩 オルレアンの少女」は『自治新聞』最終号となった大正四年一月一日『自治新聞』に「さ、ふね」名義で三章まで掲載され、未完と記されて終わっている。『貼雑年譜』記載の乱歩の説明によれば、「コノ稚気満々タル叙事詩ノ如キモノハ、前記回覧雑誌『白虹』ノ何号カニ寄稿シタモノヲ、大胆ニモ自治新聞ニ掲載シタ」といい、「コノ文章デモ分ルヤウニ、私ハ大学時代文学トイフモノヲ全く知ラナカツタ」と記されている。『白虹』と『自治新聞』に二回寄稿して活字化し、自身の半生の記録である『貼雑年譜』にも「私ノ長詩」として『自治新聞』の記事を貼りつけてあることから、「稚

気満々」とは言いながらもこの作品を完全に否定していたわけでもなかったと見られる。

『自治新聞』に掲載された「長詩 オルレアン少女」は、「(一) 憂の雲」、「(二) 神の示現」、「(三) 激戦」の三章分である。第一章ではフランスの戦状、第二章では神の啓示を受けるジャンヌ・ダルク、第三章では戦場でのジャンヌ・ダルクを擬古文で詠じている。第二章「神の示現」では夏の夕暮れに草原で三人の聖者の啓示を受けるジャンヌが詠われ、第三章「激戦」では「二千四百三十年 五月なかば」という具体的な年月が示されているなど随所に詳細な言及が行われていることは、創作に際して何らかの参考資料が存在した可能性を強く示している。本詩が創作された大正初期頃の日本において、ジャンヌ・ダルクの知名度はいかばかりのものであったのか。明治二、三十年代に発行された複数の中等学校西洋史教科書にはジャンヌ・ダルクへの言及を確認できる。

時に、ジョアンダーク Joan Darc と称する一少女あり、仏国の救済者と称し、仏人を率ゐ、自ら先鋒に立ち、オルレアンス Orleans 城の囲を解き、チャールスをしてレイムス Reims に踐祚せしむ、(小川銀次郎編『西洋史要』、明治三二年三月金港堂)

シャルル七世の孤守せるオルレアン府を囲み、其陥落旦夕に迫りしが、会、ジャン・ダークと称する一少女民間より起り、(高桑駒吉編『中等西洋史』、明治三二年六月大日本図書)

ジョアン、ダーク——一小女の身を以て義兵を起こし一四二九年オルレアン城の囲を解きて敵兵を逐ひしかば二年の後其身捕虜となりて(本多浅治郎『新体西洋歴史教科書』、明治三二年九月開盛堂)

チャールス七世の即位せし時には(中略)オルレーアン城は重圍に陥りしがジョーアン・オヴ・アールクと云へる一処女其圍を解きて敵軍を退けぬ。(白鳥庫吉『新撰西洋史』、明治三二年一月富山房)

仏王チャールス六世の死後に、英王其の後を承くべき約を結びしに、其の約行はれざりしかば、英軍大に侵入して、巴里を陥れ、オルレアン(Orleans)を囲み、仏国の危急、殆ど旦夕に迫れり。ジーン、ダーク(Joan Darc)といふ一少女、民間より奮起して義を唱へ、神託を受けたりと宣言して、諸軍を指揮し、英軍を敗りて、オルレアンを解かしめき。(修文館編集部編述『新撰西洋史』、明治三三年四月松栄堂)

ジョアン、ダークなるもの一少女の身を以て義兵を起し一四二九年オルレアンを包圍を解きて敵兵を逐ひ(本多浅治郎『新撰西洋史教科書』、明治三五年四月宝永館)

オルレアン市の女傑ジャンヌ、ダルクは率先して国民の士気を振興し、遂にオルレアン城の敵圍を解きカロロをレイムスに迎へて王旗を懸がへしたり、(吉国藤吉編『西洋史』、明治三六年一二月内田老鶴圃)

このように、ジョン、ジョアン、ジョーン等日本語表記は不統一ながら、明治二、三〇年代に発行された多数の教科書でジャンヌ・ダルクへの言及を確認できる。

教科書の他にも、フリードリヒ・シラー<sup>三</sup>が一八〇一年に執筆したとされる戯曲「オルレアン少女」は、日本でも明治三六年に藤澤周治による訳が「富山房より刊行されているのをはじめ、大正三年一月水上斎訳版など多くの日本語訳版が存在する。『世界古今名婦鑑』(徳富蘆花編著、明治三一年四月民友社)のような女子教育を目的とした女性偉人伝記集にも宮崎湖処子による「オルレアン少女」が収録され、明治大正期の日本においてオルレアン少女ことジャンヌ・ダルクは、女子が規範とすべき信仰心の篤い勇敢な孝国の少女として位置づけられていたといえる。

明治二七年生まれの乱歩は教科書でオルレアン出身の少女のことを学んでいた可能性があるが、前掲のように教科書のジャンヌ・ダルクに関する記述はどれも簡略なもので、教科書から得た知識だけでは執筆が困難な場面も「長詩 オルレアン少女」に含まれている。「長詩 オルレアン少女」執筆

には他に何らかの参考資料が存在したと考えられ、以降、その材源を追究する。

## 二、シルレル作「オルレアン少女」と宮崎湖処子作

### 「オルレアン少女」

歴史上の偉人として知られていたジャンヌ・ダルクを長詩「オルレアン少女」として創作するに際し、どの資料に依拠したのか。

そこで、大正三年までに「オルレアン少女」と題されていたシルレル作『悲劇 オルレアン少女』の日本語訳と、『世界古今名婦鑑』所収「オルレアン少女」の内容を最初に検討する。まず、シルレル『悲劇 オルレアン少女』の翻訳版の内容を見ると、ヒロインはシルレルの原語を反映したヨハンナというドイツ語の女性名である。明治三六年藤澤訳版より、第一幕のヨハンナが神の啓示を受ける場面を引用する。

妾が在所より、程遠からぬ其の所に、いたう靈驗灼然れいげんやくぜんにて、詣づる人の跡絶えぬ、聖母の尊像立たせしが、其の傍に一本の、年経し櫛かみは生ひ立ちたり。(中略) 何時の程にて候ひしか、それなる木陰に、終夜よもすがら、神を念じて坐りしに、催す眠りは耐へ難く、何とはなしに夢うつゝ、現はれ給ひし聖母の御姿、剣と旗を荷はせて、等しく装ふ羊牧者のおんよそほひ、御声涼しく宣ふやう、「ヤヨ、ヨハンナ羊の群れを打ち棄てよ。神は、汝を其の他の勤めに、用い給ふぞよ。イデ、此の旗を受け取れや。これなる剣を帯おびよかし。国に仇なす敵を破り、汝が君をライムに導き、其所に王冠捧げよ、」と、仰せに妾はわな、かれ、(中略) 見上げまつれば有難や、白き百合をば手にしたる、(シルレル作、藤澤周治訳『悲劇 オルレアン少女』、明治三六年一月富山房)

ジャンヌの住まいにほど近い櫛の木陰でうとうとしていると聖母が現れ、従軍を促したという。聖母は続けて三夜続けて現れたが、三日目には「そも服従といふことは、この世の婦女せんなんが務めなり」と、怒りの形相であったとあ

る。一方、「さ、ふね」名義長詩での見せ場の一つである神の示現の場面は、以下のとおりである。

ひと日、後園にイみて。夏草しげき、庭もせを。うち眺めつゝ、物思ふ。おりしも、あれや、会堂の。彼方、遙かに、燦として。怪しく、白き火を見たり。あなや、と思ふ間もあらず。遠き、み空に声ありて。『ジャンヌよ、心、正しかれ。な、怠りそ、礼拝らいはいを。』(中略) 瑞雲、空に漲みなぎりて。あまたの、天女、かしづける。三たりの聖者、我が前に。瞭然として現はれぬ。(さ、ふね作「長詩 オルレアン少女」、大正四年一月『自治新聞』第四号。『貼雑年譜』スクラップ分より。以下、引用同じ。)

暮れの屋外で三人の聖者から啓示を受けている点において、聖母が一人現れて啓示を与えるシルレルの戯曲とは大きく異なっている。また、『悲劇 オルレアン少女』はジャンヌの恋情を絡めることで一層の憐みを強調しているが、「さ、ふね」版ではジャンヌの心情に触れられていないという相違もある。この他、シルレルの『悲劇 オルレアン少女』に明らかな類似を見せている描写が見られるわけでもなく、シルレルの戯曲に依拠していたのではないと結論付けられる。

続いて『世界古今名婦鑑』(前掲同)所収の宮崎湖処子「オルレアン少女」の検証を行う。同作でのヒロインは「ヂヤン、ダーク」表記であり、「ある夏の日彼は父の菜園に坐してありしに、会堂の方に当つて、天開けて電火閃くを見き」という文言で啓示を受ける場面が始まっている。天上からの声を聞き、後日聖ミカエルの声と共に顕れた聖カザリン、聖マーガレットの二聖人を目撃し、フランスを英国から解放すべしとの示現を「幽玄なる言語を以て云ひ顯はし」たとなっている。ここでは示現の内容は明言されず、三、四年後になって「曖昧なりし異象の意味は、次第次第に発明されたり。然して其の発明されたる異象の意味の、オルレアンの救はるゝこと、国王のレイムに於て冠することの一事にあること、最早疑ふべからざるに至」って従軍を決意したことになっている。

宮崎版のジャンヌは「思慮ふかき心」を持った勤勉で謙虚な性質の少女で、

神の示現というよりは彼女の思慮が従軍の意志を固めたものとして描かれている。また、戦地での武功や捕虜となった戦の顛末は詳述せず、慎ましい人柄を強調している。対するさ、ふね名義「オルレアン少女」（以下、「さ、ふね」版と記す。）では、三人の聖者が「汝、フランスの難に赴くべし」と具体的な示現で明確に従軍を命じる場面はあるがジャンヌの篤い信仰心を強調しているわけではなく、戦の激しさを描写することで男勝りなジャンヌ像を描いていることが特徴として挙げられる。宮崎版「オルレアン少女」もシラーの戯曲同様、「さ、ふね」版の取材源であったと判断する妥当性を欠く。

### 三、中内蝶二著『惹安達克』

大正三年までに出版されていたジャンヌ・ダルクの人生を描いた書籍から「さ、ふね」版と類似の見られるものに、文学博士中内蝶二著『惹安達克（じゃんぬだるく）』（明治三四年一二月博文館、世界歴史譚第拾貳編）がある。同書は、『女学世界』第一巻第二号（明治三四年二月）、第一巻第三号（明治三四年三月）に掲載された中内蝶二による伝記「惹安達克」に加筆し、世界歴史譚シリーズの一つとして刊行したものである。ヒロインの名の「惹安達克」<sup>ジャンヌダルク</sup>、「惹安」<sup>ジャンヌ</sup>という表記は、藤澤周治訳版『オルレアン少女』の「ヨハンナ」や宮崎版「オルレアン少女」における「ジャン、ダーク」に比べ、「さ、ふね」版に近い。

『惹安達克』は、序説に始まり第一章から第八章までに結論を加えた構成である。各章には章題がつけられ、第二章は「疴爾良城の危急」<sup>おるれあじやう</sup>である。同章には、「オルレアン城の運命は旦夕に迫り。仏蘭西の滅亡は眼前に逼り」と、オルレアン城の危機はすなわちフランス国家の危機であることを二文に分けて伝える表現がある。章題に使われている「危急」という語は「さ、ふね」版の「オルレアン城危し。国家の危急旦夕に逼る。」という書き出しの一文でも使用され、緊迫したフランスの情勢を強調している。

『惹安達克』の原作ともいえる『女学世界』版「惹安達克」には「運命は旦夕に迫り」という表現は見られず、『惹安達克』のみ確認できる。世界歴史譚第拾貳編中内蝶二『惹安達克』を参考に、「さ、ふね」名義で大

学生時代の江戸川乱歩は「長詩　オルレアン少女」を執筆したのではないか。

『惹安達克』第三章「奇代の少女（上）」にはジャンヌ・ダルクの生い立ちや神の示現、従軍が描かれている。ここで、示現の場面を参照する。

頃しも千四百二十五年の夏の日のことなりき、惹安例の如く後園を逍遙しける時、何処ともなく、『惹安よ、惹安よ』と我名を呼ぶ者あり、左眄<sup>さへん</sup>右顧<sup>ごこ</sup>身を窺へども人の影を認めず、首を傾け、耳をそばだて、声の来る所を考ふるに、確かに寺院の方より聞こゆるもの、如し。太く驚きて仰ぎ見むとすれば、倏忽<sup>たちまち</sup>一道の光明赫灼として空中に燿きぬ。（中略）漸くにして我に回れば、三人の天使空より降りて惹安が傍に來り（中内蝶二著、山中古洞画『惹安達克』、明治三四年一二月博文館、世界歴史譚第拾貳編。以下、引用同じ。）

「さ、ふね」版「（二）神の示現」における示現の場面は前章で引用している通りであるが、夏の後園にいたジャンヌが会堂の方角に怪しい光を認める、何者かがジャンヌの名を呼ぶ、空から三人の聖者が降りて来るという点で一致していることがわかる。三人の天使のお告げとジャンヌの反応を描いた場面についても、類似が見られる。

凜然として神命を伝へて曰く『起て惹安よ、汝は仏蘭西の社稷を救はざるべからず』と、惹安怪み且つ恐れて答へて曰く『天使よ、妾は賤しき農家の女にて侍り。太刀持つ業は勿論馬に騎ることだにかなはぬ身にて、如何でか然る大業の為し得らるべき』天使『否とよ、惹安憂ふること勿れ。神命なり、唯速やかに將軍ボードリクルの下に行け』と。（『惹安達克』）

フランスを救うのはジャンヌだと呼びかける天使に、賤しい農家の娘で武術の心得もなく、国家を救うという大業は自分には無理だとジャンヌは答える。それを聞いた天使は、心配せずにボードリクル將軍の下へ行くように

指示する。「さ、ふね」版「(二) 神の示現」では、

『ジャンヌよ、汝、フランスの難に赴くべし。』妾の如き賤の女が。など、  
さる事の、為し得べき。神よ、妾は女なり。智恵と力のすぐれたる。勇  
者も世には、あらんもの。かくと叫べば、声ありて。聖者は又も、の給  
ひぬ。ことば『憂ふる勿れ、只だロベール將軍の下に行け。』(「さ、ふね」  
版)

国難を救うべきだとの天使の言葉に対し、賤しい身分の女である自分では  
なく、他に適任者がいるだろうとジャンヌが答え、天使は心配せずにロベ  
ール將軍の下へ行くよう告げている。賤しい身分であるというジャンヌの回答  
だけでなく、「憂ふること勿れ。神命なり、唯速やかに將軍ボードリク  
ールの下に行け」(『惹安達克』)、「憂ふる勿れ、只だロベール將軍の下に行け。」  
(「さ、ふね」版)と、將軍の名は変えてあるものの、ほぼ同一の文句で返答  
している。

三人の天使の啓示を受けたと信じるジャンヌは、フランスを救う役目を  
負っているのは自分であると考えて將軍に面会する。『惹安達克』では、ジャン  
ヌの「熱誠」に心動かされた伯父が、彼女を將軍の下へ連れて行く。ジャン  
ヌはボードリクール將軍に面会し、「妾は神の示現を蒙りて、仏国の危き  
を救はむがために来れり」と述べる。田舎娘然とした服装のジャンヌを見た  
ボードリクール將軍は、「必らず狂女ならむ」と考えてジャンヌを退け、「予  
言者も人に信ぜられざることあり。惹安が満腔の熱誠も、遂にボードリク  
ールを動かすこと能はざりしか」と、ジャンヌの熱意は通じなかつた。一旦ボ  
ードリクールに拒否されたジャンヌは再度ヴークリユールで將軍に謁見し、「願  
はくば、妾に仮すに一隊の兵士を以てせよ」と願い出ている。將軍とジャン  
ヌの初の面会から三週間経過しジャンヌの熱意が人々に通じ始めた様子は、  
「到る所に嘲笑を招きし惹安が言も熱誠天に通じて漸く人の用うる所となら  
むとす」とあり、ジャンヌの熱意が「熱誠」という語で説明されていること  
がわかる。

一方、「さ、ふね」版では、ロベール將軍に面会したジャンヌは「將軍よ

願はくば。妾に、一隊の、兵をかせ」と請い、「我れ。神の示現によりて。  
フランスを救ひ。正しき。国王、シャル陛下を、助けまつらん」と決意を  
表明している。揺るぎない意志を示すジャンヌの様子は、「鉄をも焼かん、  
熱誠に。少女の眼、輝きて。双頬、燃ゆる、火の如し。噫、偉大なる信仰よ。  
初めは、狂と嘲りて。打ち笑ひつゝ、聞きあたる鬼神の如き將軍も。思はず、  
涙、さしぐみて」と描写されている。

「神の示現」に従いフランスを救うためにやってきたと將軍に述べ一隊の  
兵を借りることを願っている、神の示現に従い従軍を希望するジャンヌを狂  
人として嘲る、ジャンヌの熱意を「熱誠」と表現している、最初は嘲ってい  
た人々がジャンヌの熱誠に心動かされるようになるなど、「さ、ふね」版の  
短い場面内でも多く『惹安達克』と一致する語彙や酷似した描写が見られ、  
示現を受けたジャンヌが將軍に初対面を果たし従軍するまでを描いた「(二)  
神の示現」では多く『惹安達克』に拠っていることがわかる。

「(三) 激戦」では、「一千四百三十年。五月なかば」の戦いが描かれてい  
る<sup>四</sup>。『惹安達克』では、ジャンヌがボードリクール將軍に初の面会をした「紀  
元千四百二十八年五月十三日」から「紀元千四百二十九年四月二十七日」の  
英軍の包囲するオルレアン城でのジャンヌの活躍まで詳述しているが、「さ、  
ふね」版では將軍ロベールとの面会の後、「一千四百三十年。五月なかば」  
まで月日が飛び、『惹安達克』第四章相当箇所から第六章相当箇所まで割愛  
されている。『自治新聞』掲載分は捕虜となる場面まで行かずに未完となっ  
ているが、一四三〇年五月半ばという日時からコンピエーニュの戦いを描こ  
うとしていたと推察され、疲弊したフランス軍兵士を目にした將軍は、「此  
の戦ひに敗れなば。ア、永久に、フランスの。社稷の祀り、絶えはてん」と、  
国家の将来を案じて嘆いている。

対する『惹安達克』第七章「女傑の末路」では、「紀元千四百三十年五月  
廿日」、コンピエーニュで英軍に突撃するジャンヌが捕虜となり、「紀元  
千四百三十一年五月三十日」に彼女が処刑された後の民衆の評判まで描かれ  
ている。『惹安達克』の最終章「結論」においては、「城壘悉く陥り、国土到  
る所に蹂躪せられ、王は辺陲に蒙塵して、また頼るべき処なく社稷永く祀り  
を絶たむとせし仏蘭西の国家が幸に運命を今日に全うし得たるはこれ全く惹

安が賜物にあらずや」と、ジャンヌの功績を称えている。

「オルレアン少女」と題された「さ、ふね」名義長詩は、ジャンヌ・ダルクの行状を詠った叙事詩というにしては簡略な内容である。しかし、ジャンヌの人生を変えることとなった夏の草原における神の啓示の情景描写や、捕虜となったコンピエーニュの戦いの正確な年月、既に述べたフランス国家の「危急」が「旦夕に」迫るといった語彙の他、「軍旅」、「剣激」、「敵壘」などの語も『惹安達克』で使用されているものである。『惹安達克』序説では、国王から庶民までを救い国家を守った、回天の偉業と呼ぶにふさわしい功績を残した女傑は全世界でジャンヌ・ダルクしかいないとしている。対する「さ、ふね」版はフランスの窮状や激しい戦況をもとせず立ち向かうジャンヌを詠ったもので、三人の天使の示現を受けて従軍を志願したことになってはいるが宮崎版「オルレアン少女」のジャンヌのような敬虔さは強調されておらず、シルレル作『悲劇 オルレアン少女』のように女性の美德としての従順さや愛情深さを備えた人物であるとしてもしていない。

大学を卒業した平井青年はいくつもの職を転々とした後の大正一二年、「二銭銅貨」で江戸川乱歩という筆名を掲げ作家デビューを果たすが、人気作家となり多くの作品を執筆するようになって、男女の恋愛をメインテーマに据えることはほとんどなく<sup>五</sup>、特定の神仏や宗教への篤い信仰心を描写することもなかった。

「さ、ふね」名義で『自治新聞』に発表された「長詩 オルレアン少女」はジャンヌ・ダルクの勇ましい戦いぶりを描いた『惹安達克』を材源に選択して書かれていたということから、恋愛にまつわる心理的機微を詳細に描写することを好まない、特定の神仏への信仰心に重きを置かないという江戸川乱歩作品の特徴は、大学生時代の創作活動ですでに萌芽していたことがわかる。

乱歩の作品に登場する女性の中でも、美貌に惹かれて寄ってくる若い男性を次々に殺害する「化人幻戯」（昭和二年一月）『別冊宝石』、昭和三〇年一月〜一〇月『宝石』の伯爵夫人や、防空壕の中で一夜を過ごした相手が若い美女であると信じている男に対し、若い女と間違われていたことを最初から知っており、若い女性のように振る舞い通した「防空壕」（昭和三〇年

七月『文芸』）の老女は、女性とは男性の庇護を受けなければならない弱い存在であるという社会通念が真実ではないことを明示している。男性の庇護なくとも知恵を働かせ自力で行動し、男性を欺き陥れることも厭わない強かな女性は、前述二作品以外にも「一人二役」（大正一四年九月『新小説』）や「妖虫」（昭和八年二月〜昭和九年一〇月『キング』）、『ぺてん師と空気男』（昭和三四年一二月桃源社）など、乱歩作品に多く登場する。

実は強かな女性が乱歩の作品に頻繁に登場した理由として、他者の庇護が必須のように見せかけその実周囲を手玉に取っている女性とは、読者が事件の犯人を推理する楽しみを長く保持することが要求される探偵小説の悪役として、意外性があり用いやすい人物像の一つだったからだろう。

「乱歩打明け話」（大正一五年九月『大衆文芸』）には、乱歩が中学二年十五歳の「性的な事柄をまだよく弁へない少年時代」に、「実にプラトニックで、熱烈で、僕の一生の恋が、その同性に対して皆使ひつくされて了つた観がある」ほどの初恋を同い年の少年相手に体験したと記されている。その時に純粹な恋愛感情を使い果たし、以降は異性に恋とも見える感情を抱くことはあったが、性的関係が伴うせいか不純な偽物の恋のように感じられてならないと続けられている。

乱歩にとっての女性とは憧憬の対象としての理想的存在ではなく、むしろ現実への対峙を余儀なくされる存在であったと考えられる。社会的制度や肉体的な問題から男性より不利な立場に置かれているかもしれないが、実際に従順で男性より弱いとは限らないという女性観を有していたものである。肉体的、社会的な不利を理知や行動力で補い男性に比肩する働きを見せる乱歩の諸作品の女性とは、『惹安達克』のジャンヌ・ダルク像とも共通している。身体能力の弱さや社会的制約を知恵と行動力で補い活躍する人物像とは、江戸川乱歩名義で作家活動を行うようになってから発表した少年探偵団シリーズ<sup>六</sup>に登場する明智小五郎の少年助手・小林芳雄と少年探偵団員たちにも該当する。身体機能や社会的立場は知恵や機転と比例していないことを証明する乱歩作品の女性や少年は、作中人物に自身を重ねて読む少年読者や女性読者に活躍の可能性を自覚させ、夢を与える存在であっただろう。

## おわりに

本稿では、『貼雑年譜』に残されている「長詩 オルレアン少女」を元に、シルレル作・藤澤周治訳版『悲劇 オルレアン少女』、『世界古今名婦鑑』所収の宮崎湖処子「オルレアン少女」、中内蝶二『惹安達克』との比較を行い、「さ、ふね」版「長詩 オルレアン少女」は『惹安達克』を参考に創作されたとの結論に至った。

ジャンヌ・ダルクは明治時代の日本でも知名度が高く、ジャンヌ・ダルクをテーマとした文芸作品も多数出回っていた。女子教育を意識して書かれたもの、従順さと愛情深さを持ち、国の運命を背負って勇ましく戦う少女を描いたものなど作者によって作品内でのジャンヌ像は様々であったが、一介の大学生であった平井太郎、後の江戸川乱歩が魅力を感じ模倣したのは、自らの性別が女性であることをさほど意識せず、男性と対等に国家の戦争に勇敢に身を投じてゆくジャンヌ・ダルク像であった。

「さ、ふね」版「長詩 オルレアン少女」が『惹安達克』を参考に執筆されたことから、江戸川乱歩名義で活動するようになって以降の作品の、恋愛感情や特定の神仏の霊験、男性に一方的に庇護を受ける立場としての女性について詳細に描くことを好まないという傾向は、大学生時代から存在していたものであるといえる。「さ、ふね」版で描かれたジャンヌ像は、社会的、肉体的不利を勇気で補い、社会的にも肉体的にも恵まれていた男性以上の働きをする少女であった。不利な立場にいるように見える女性や子供が理知を武器に、成人男性に比肩する活躍を見せる例は江戸川乱歩名義で発表した諸作品にも多く存在する。素人時代の江戸川乱歩が「さ、ふね」名義で書いた「長詩 オルレアン少女」では、作家活動を行うより前に早くもこうした人物像を取り入れていたことになる。

なお、『惹安達克』では「チャールス」「ヴークリユール」と表記されている固有名詞が「さ、ふね」版では「シャール」「オークルユール」と表記されていることから、『惹安達克』の他にも参考とした資料が存在したと考えられる。『白虹』には掲載したというが『自治新聞』には掲載されなかった「長詩 オルレアン少女」後半部分の精査と並び、『惹安達克』以外の参考資

料の追究が必要である。

## 注

- 一 『貼雑年譜』には、編集所は鍛冶橋近くと記憶する、とある。
- 二 『貼雑年譜』では、乱歩と同じ早稲田大学の学生であった長谷川光太郎君と説明されている。乱歩とともに『川崎克伝』編纂を行った長谷川光太郎と同一人物であり、『川崎克伝』の『発刊・編纂に際して』から国民新聞社調査部に所属した経験があることがわかる。
- 三 現代ではシラー表記が一般的だが、以降の本稿では藤澤周治訳版での表記に従いシルレルと表記する。
- 四 『女学世界』第一巻第三号掲載分「惹安達克(下)」では、一四二九年五月六日早朝から二日間にわたって練り広げられた英軍と仏軍の「激戦」が述べられている。「さ、ふね」版の「激戦」は一九二九年五月中旬を詠っており、『女学世界』版「惹安達克」での激戦とは日付が異なっている。
- 五 大正一五年一〇月一日『サンデー毎日』掲載の「人でなしの恋」では、練り返し強調されている語り手の女性の恋心が夫の死を招くこととなっているが、恋愛模様の描写が作品の重要なテーマであるとは言い難い。
- 六 昭和十一年一月から同年十二月にかけて講談社の月刊少年誌『少年倶楽部』に連載された江戸川乱歩作「怪人二十面相」に始まる一連の作品で、小林芳雄を団長に掲げる少年探偵団員たちと手を変え品を変え彼らを脅かし時には少年たちの実家の家宝をも狙う怪人二十面相との対決を描き、少年読者の支持を得た。

付記 引用文は特記したものを除いてそれぞれ初出により、通行の字体を用い、適宜ルビを省いた。なお、本研究はJSPS科研費25770080の助成を受けた成果の一部である。

